

なぜ作戦が必要なのか

はじめに

戦争に関して、戦略 (Strategy)、作戦 (Operation)、戦術 (Tactics) という 3 つの語がある。それぞれの語の英語の語源は諸説あるが、“Strategy”は、古いギリシア語の “Strategos” 「軍司令官」であり、“Tactics” が、同じく古いギリシア語の “Taktike” 「軍隊を動かすこと」であるという。一方で、“Operation” の語源は、ラテン語の “operari” で「操作」だという。戦略、戦術が古いギリシア語の、もともと戦争に関する用語であるのに対して、作戦は直接には戦争とは関係しない語が語源となるという。こうしたことが、戦略や戦術に対して作戦はわかりにくいとされる原因の一つなのかもしれない。

中村好寿によれば、「作戦」という用語を、現在の軍事用語のような意味で使用し始めたのは、19 世紀のプロイセンの参謀本部からであるらしい¹。様々な戦略論等を紐解くと、戦略と戦術の論述は多いものの、作戦に関するものは、比較的新しいものに限られてくる²。

米軍をはじめとする各国軍は、作戦のドクトリンとともに作戦計画立案のドクトリンを制定している。これらのドクトリンは、1982 年の米陸軍の野外教範 (Field Manual) 100-5 (FM100-5) を嚆矢とする。

我が国においても、近年、故片岡徹也などが作戦術について紹介し、戦争の作戦レベルの重要性を明らかにしている³。

戦争が人類の歴史が始まった以来の事象であるということを考えると、「作戦」は比較的新しい概念ともいえる。

本稿では、戦争に備えるということにおける作戦の位置づけを確認し、戦争の目的の達成のため、なぜ作戦が必要なのかを明らかにすることとしたい。

1 戦争に備えるということ

「汝、平和を欲さば、戦争に備えよ」という警句がある。これには、「勝利を望む者は、兵士を厳しく訓練しなければならない。結果を出したい者は、技量に

¹ 中村好寿『「作戦」とは何か』中央公論新社、2019年、40頁。

² 現在の作戦に関する論述は、ルトワック (Edward Luttwack) から始まった。Edward Luttwack, “The Operational Level of War,” *International Security*, Vol. 5, No. 3, Winter 1980/81, pp. 61-79.

³ 我が国における「作戦術」「作戦レベル」に関する論述は、片岡徹也の他、中村好寿、斎藤大介、北川敬三などにより明らかにされている。片岡徹也『軍事の事典』東京堂出版、2009年。中村『「作戦」とは何か』、斎藤大介「戦争を見る第三の視点—「作戦術」と「戦争の作戦次元」—」『戦略研究』第12号 2013年1月、79-100頁。北川敬三「安全保障研究としての「作戦術」—その意義と必要性—」『国際安全保障』第44巻第4号、2017年、93-109頁。

依って戦うべきであり、偶然に依って戦うべきではない」と続く⁴。敵に侵略を受けないためには、あるいは、先手を打って戦争を仕掛けて勝利を得るためには、計画を立て、十分な準備をし、敵に勝てる態勢をとることが重要ということであろう。

クラウゼヴィッツ (Carl von Clausewitz) は、『戦争論』で、戦争とは「相手にわが意思を強要するために行う力の行使」と述べている。戦争の目的は、敵を撃破することではない。相手を私の思うとおりにするために、暴力という手段を使って相手を屈服させるという目標を達成することであることを忘れてはならない。

ヨーロッパの思想ばかりではない。孫子には、「国を全うするを上と為し、国を破るはこれに次ぐ」「戦わずして人の兵を屈するは善の善なるもの」などと述べられており、戦争は国家目標（望ましい状態 (Desired End State)）の達成の手段であり、そのために戦争に備えることの重要性を説いている。

攻めるにせよ守るにせよ、実際に戦争を起こす前に、戦争に備えていなければならない。

2 作戦とは何か

戦争に備える上で、作戦はどのような位置づけになるだろうか。

まず、我が国における一般的な作戦という語に対する理解は、以下のとおりである⁵。

作 戦 Operation

- 1 広義には、軍隊（自衛隊）が与えられた任務達成のために遂行するあらゆる軍事行動（防衛行動）をいう。
- 2 狭義には、ある目的を達成するまでの一連の戦闘行動をいい、捜索、攻撃、防御、移動、機動等及びこれに必要な後方活動を含む。

一方で、米軍では、戦いのレベル (Levels of Warfare) を、戦略、作戦、戦術に分け、これらを「国家の目的と戦術行動の関係のモデル」として位置づける。このうち、作戦レベルは、「軍隊の戦術的用法を国家の目的に関連付ける」中間のレベルと定義している⁶。

ルトワック (Edward Luttwack) は、米軍は朝鮮戦争とベトナム戦争の経験か

⁴ “si vis pacem, para bellum” 4世紀頃のローマ帝国の軍事学者レナトゥス (Flavius Vegetius Renuus) の言葉とされている。

⁵ 防衛研究会編 『国防用語辞典』 朝雲新聞社 1980.12

⁶ Joint Chiefs of Staff, Joint Publication 3-0, Joint Operations, January 17 2017 Incorporating Change1, October 22, 2018.

ら、第三世界とのかかわりでは、火力偏重の消耗戦の積み上げではなく、機動戦による「短い戦争」、作戦のレベルの適用により勝利をおさめることが必要になったと述べている⁷。作戦とは、一連の戦術行動が、政策の目的に合致するようにし、敵の破壊ばかりではなく、敵の機能を停止させることによる、消耗戦と機動戦の間の最も効果的な手段を用いることなのである。

同じくルトワックは、作戦の事例として 1939 年から 1942 年の旧ドイツの電撃戦を挙げている⁸。

電撃戦では、戦術レベルでは横からの攻撃に脆弱な、細い（機甲部隊と戦術航空機部隊からなる）縦隊を、とにかく敵に深く侵入させる。作戦レベルで見れば、侵入のスピード（時間）で優位に立つ。短時間で敵陣深く侵入することによって、敵に情報の不足と混乱を引き起こす。敵は、ほんの一部にしか攻撃を受けていないのもかかわらず、防衛線が崩壊し、組織的抵抗ができなくなる。

戦術レベルにおいては、目前の敵の撃破が注目され、これを重ねて防衛線全体を撃破するのが「消耗戦」である。一方、作戦レベルにおいては、電撃戦のように、多くの無傷の敵があったとしても、時間、指揮統制の要素に適切に働きかけ、一部の機能を低下させ続けることで、全体として機能を停止させるという「機動戦」という考え方を採用することもある。

ドイツの戦争の目的が、フランスの屈服であると考えれば、軍事的な目標は、防衛線全体の撃破ではなく、フランス軍の組織的抵抗の崩壊でよいことになる。これが戦術と戦略を結ぶ作戦ということである。

3 なぜ作戦が必要なのか

作戦は「軍隊の戦術的用法を国家の目的に関連付ける」戦略と戦術の中間に位置づけられるものである。現代の戦争においては、国家の目的を達成するにあたって、政治、経済、外交及び軍事を適切に組み合わせる必要がある。米国などの大国は、戦争終結後、戦地の社会の再構築に責任を負う場合もある。また、軍事力の破壊的な機能でない側面を活用する「安定化」というような軍事行動も増えている。国家の軍事力に対する期待は、大きく様変わりしているといえる。

2003 年に開始されたイラク戦争は、当初の大規模作戦が 2 ヶ月で終結したにもかかわらず、戦後処理には 9 年を要した。米政府は、戦後処理のために積極的に軍を関与させることの認識が薄かったが、2007 年に戦略を変更し、治安維持のための軍の役割に、地域住民の信頼の獲得を加えた。対反乱作戦を、反乱組織のテロ活動に対しての「モグラ叩き」での対応から、戦略方針の変換により、兵

⁷ Luttwak, “The Operational Level of War,” pp. 62-63.

⁸ Ibid, pp. 67-70.

力を一時的に増派し、地方自治体と連携協力したパトロールを強化することによって、地域住民の信頼を獲得することを主眼とした作戦として、治安の確保につながった。地域住民の信頼を獲得したことは、治安の好転のみならず、米国への信頼獲得となり、民主的なイラクの政体の確立につながり、2011年、イラク戦争終結を宣言することができた⁹。戦後処理のための地域住民の信頼獲得等は、従来、文民の所掌と考えられていたものであって、軍事力へ期待するものでなかった。

あるいは、核兵器等、使用した場合の影響が壊滅的な兵器の登場、国際社会的な制約等によって、軍事的合理性に基づく無制限の兵力の使用が許されず、当初から兵力の使用に制限を受ける場合もある。そうした際には、機動戦の考え方を適用する必要がある。

このように状況が複雑になり、消耗戦でただ敵を打倒するのみでは、軍事力を行使する目的を達成できない。だからこそ、望ましい状態を明確にしたうえで、それを実現することが必要となる。

作戦レベルが必要とされるのは、このように戦術的な成功がかならずしも望ましい状態の構築に直結しない場合が増えたからである。であるからこそ、戦術的な成功の積み上げのみでは不足であり、その順序、時期、組み合わせの妙によって成功を勝ち取るための「作戦」が必要なのである。

おわりに

これまで述べてきた通り、作戦は政策としての目的と戦術の科学的な側面とをすり合わせるものである。

作戦として戦術をどのように使うかを検討すれば、情報を得るための捜索が必要になる。火力を指向するための適切な位置に占位するための機動が必要になる。戦闘に入る前に補給が必要になる。敵を撃破するための攻撃、敵からの攻撃に対する防御も必要である。作戦を実施する戦場へ向けての移動が必要である。こうした一連の行動を並べてみると、我が国の一般的な「作戦」の定義のとおりではある。しかし、作戦の主眼は、これらを適切な順序と時期に適切な組み合わせで実施するということであり、この点について、我が国の一般的な定義では不足している。

海上自衛隊戦略指針によって、目標達成の手段として保有すべき能力は、「考え出す」能力（立案能力）、「守り抜く」能力（作戦能力）、「支え切る」能力（継戦能力）が示された。まさに、これまで述べてきた通り、作戦を立案して、実行

⁹ 吉岡猛「イラク戦争における戦後処理戦略―「サージ戦略」への転換とその背景分析―」、『海幹校戦略研究』2013年5月(3-1)、79-104頁。

していく能力のことであろう¹⁰。

戦術の能力を身につけてきた初級幹部が、中級以上の幹部として、次の段階に作戦の能力を身につけることが期待される。

作戦について、理論としては解説してきたとおりであるが、この先が問題である。作戦の感覚を身につけなければ、作戦の計画の方法はわかっている、実際の計画の立案はおぼつかない。これに関しては、「作戦の神様」秋山真之は、以下のように述べている¹¹。

作戦に習熟する、作戦の感覚を身に着けるためには、過去の戦例を研究し、その真髓を現示の状況に合わせて改良していく。また、実地での修練が必要であり、作戦に参加することが最良であるが、実戦などみだりにすべきものでない。そのため、演習、図上演習に参加することで代替していくのである。

海上自衛隊幹部学校運用教育研究部
1等海佐 北原 浩一

(本コラムの記述内容(和訳語を含む。)は、あくまでも執筆者個人の独自見解であり、防衛省または海上自衛隊としての統一見解を表すものではありません。)

¹⁰ 海上自衛隊ホームページ「海上自衛隊戦略指針」、<https://www.mod.go.jp/msdf/about/guidline>、令和3年8月13日アクセス。

¹¹ 秋山真之『海軍基本戦術』戸高一成編、中央公論社、2019年、11-20頁。